

集中
連載

身で意思決定ができるうちにと、この「自殺装置」を使つてみずから命を絶つた事件が世界を騒がせた。これが「安樂死」というものに世の関心が向く契機となつたと思う。私も記者時代、国際電話で博士に取材を試みたことがある。

電話は本人につながったが「いま処置中」ということとすぐ切られてしまった。ということは、「死の処方箋」に書かれた通りのプロセスを実行していた最中だ

つたのだろうか。
その装置とは、だが極めて口一テクなシロモノだつた。必要なのは3種類の薬品とタイマー、それにスイッチのみ。点滴用の金属棒に生理食塩水、麻酔薬のチオペンタール、塩化カリウムの入つた瓶が吊り下げられていて、スイッチを押すとタイマーによつて薬品が順番に3つのチューブから流れ出る。それは途中で1本になり、その先の注射針は安樂死希望者の腕の血管にささつているから、約2

分30秒後には眠ったまま心臓麻痺を起こし、確実に死亡する仕掛けであった。

元医師という肩書は、死刑囚の遺体はすべて即座に臓器移植に提供されるべきだ

という過激な主張がたたつて、医師資格を剥奪されていたためである。

最終的に博士は、自殺ほう助ではなく殺人罪で逮捕され服役。以後、人に決して安楽死を施さないという条件で仮釈放になり、晩年は講演活動を行っていた。

ご本人は安楽死ではなく、天寿を全うして亡くなつたが、その半生は逮捕前後にメディアを巻き込んで展開された法廷闘争を含め、YouTubeで詳しくフォローすることができる。

で過激だったが、このキボーキアン博士のおかげで世界はすこし動いたのだ。

少年に天然痘接種を試したエドワード・ジエンナー（1749～1823）、愛妻に麻酔薬を試した華岡青洲（1776～1835）にしても、誰かが手掛けないと始まらなかつた。死についてもしかり。倫理や法などは、こうした「信念の冒険者」が切り拓いた現実を、そのあとから息を切らしながら追いかけしていくのがやつとのだ。

第6回

「安楽死」は老人の本音?

ジャーナリスト

大江舞

誰だって、一生に一度ぐらい、死にたいと思ったことはあるだろう。問題はそれを、いつ、どのようにして行動に移すかだが、世の中、そうおいそれとは死なせてくれそうもない。それに、死ぬってひどく痛そうじやないかと弱虫の小生は思ってしまう。

看病のために周囲をあんなにクタクタに疲れさせるのは、これも神さまの仕業ではないか。だから、愛する人の死の悲しみよりも安堵が先にくる。あきらめもなく。これも神さまのご配慮なのだろうか。親兄弟、愛する人、友を失つた虚脱のあとに、そんな思いがふと脳裏をかすめことがある。神さまといえば、世のキリスト教徒たちを仰天させ、そうな冒頭の言葉の主は、みずから発明した「自殺装

置」を使って100人以上の人を死に至らしめた米国ミシガン州の元医師、ジャック・キボーキアン博士（1928～2011）である。もし名前を覚えにくければ「希望喜庵」と漢字を当てておけば忘れない。この問い合わせの後、博士は次のように持論を展開する。

「木に手足を釘で打ち付けられ、血を流し、罵声を浴びせられながら脇腹をヤリで突かれ、3日も4日もかけてなぶり殺しでは、みじめ極まる。尊厳などあつた

作家・堺屋太一氏が10著して広まつた造語。④
ブーム期に生まれた世
① 戦争とモノ不足を知
経済成長の中に育つた、
あつた、などが挙げられ
対の悪と信じる「経済
と組織と習慣に全幅の
いる」などが共通の性
は鉱業の用語。「堆積岩
が丸みをもつた塊となつ
ものではないだろう。それ
なら私の鋸びたおんぼろラ
イトバンの中で、彼を愛す
る人たちに見守られながら
亡くなるほうが、よほど尊
厳ある死ではないか」

1966年に小説『団塊の世代』を和22、23、24年の第一次ベビーブームと指す。共通の経験として、ない、(2)人生の最初から高度な物心がついた頃にはテレビが安全は至上の正義、暴力は絶対長を当然と感じ、既存の体制を置く「平等思想に染まると捉えられている。「団塊」と十に周囲と成分の異なる物質的状態」(前掲書)を指す。

トバンは、移動する「安楽死室」であったが、警察や司法当局に言わせれば、違法な「処刑室」ということになる。

